



要請があった現場に向かうドクターヘリ。宮里さんからも走る。1分1秒も無駄にできない

伊藤準也  
Vol.48

民間ヘリからスタートした  
異色の浦添総合病院のドクターヘリ  
島の人の命を救いたいという  
その意思は今も脈々と受け継がれている



この日2回目の出動を終えた宮里さん。機内では患者や家族の対応だけでなく運航の安全にも気を配る

尾翼には沖縄のヒーローキャラクター琉神マブヤーと「命どろ室」が



伊藤準也  
が行く  
Vol.48

浦添総合病院  
救命救急センター

# 離島の多いこの県には、 ヘリが必要。

伊藤準也は今回、沖縄県でドクターヘリを運航する浦添市の浦添総合病院を訪問。フライトナースとして活躍する宮里望さんに話を伺いました。

## 午前中に2回患者を搬送 情熱受け継ぐ空飛ぶナース

**伊藤** 今日は、ドクターヘリの出動要請があったら中断するという前提で、こうしてインタビューをしていますが、9時過ぎに1件、11時前に1件、出動要請がありました。

**宮里** 午前中に要請が2回あるのは、まずまずですね。

**伊藤** お疲れさまでした。どんなケースだったのでしょうか。

**宮里** 2件とも現場からの要請です。偶然ですが、患者さんはお二人とも60代で、脳血管障害疑いでした。tPAの投与は難しいケースでしたので、血管内治療の可能性を考え、中部にある二次救急の医療機関に搬送しました。  
**伊藤** ご家族は？

**宮里** 同乗しました。緊急で処置になった場合、説明や同意に際してご家族がいらつちやったほうがいいので、同乗をお願いすることがあります。

**伊藤** 別の取材で、何度か関東のドクターヘリの搬送に立ち合いましたが、家族が同乗したケースはあまりなかった気がします。そこは沖縄らしさなのでしょうか。

**宮里** そうかもしれません。家族の絆は強いです。

**伊藤** でも、家族も乗せるとなると、看護師さんはいへんですよ。

**宮里** 家族のケアもありますし、ヘリに乗り慣れていないので、運航の安全面にも気を配らなければいけない。やっぱりプレッシャーはあります。  
**伊藤** 浦添総合病院は、もともと民間のヘリを運営して患者さんの搬送に当

たっていた。しかも、その費用は国や県に頼らず、病院側が負担していたと聞いています。救急に対する思いがとても強いんですね。

**宮里** 民間のヘリは2005年7月から運航し、08年12月から全国で15機目のドクターヘリとして運航を開始しました。私が入職する前のことなので、当時のことはよく分かりませんが、理事長や当時の救命センター長が「離島やへき地が多く、医療格差の大きい。この県には、ヘリが必要だ」と強く思っていたようです。その情熱はすごいです。

**伊藤** このフライトドクターやフライトナースは、その熱いDNAを受け継いでいるんですね。素晴らしい。  
**宮里** みんな、情熱たっぷりです。(笑)

**伊藤** もう少しドクターヘリの運航状況について教えてください。  
**宮里** 実績としては、これまで運航を始めてからの10年間で4500件、昨年度は481件の要請がありました。ご存知の通り、沖縄県は離島が多いので、病気や事故による現場からの要請のほかに、離島から本島の医療機関に運ぶ施設間搬送の割合が高く、およそ7割になります。

**伊藤** 現場要請は、どこの地域が多い

## ヘリだけでなくDMATも 希望者多い浦添総合病院の救急

**伊藤** 現場要請は、どこの地域が多い

状況について教えてください。

**宮里** 実績としては、これまで運航を始めてからの10年間で4500件、昨年度は481件の要請がありました。ご存知の通り、沖縄県は離島が多いので、病気や事故による現場からの要請のほかに、離島から本島の医療機関に運ぶ施設間搬送の割合が高く、およそ7割になります。

**伊藤** 現場要請は、どこの地域が多い

ですか？

**宮里** 沖縄は中南部にはそれなりに大きな医療機関がありますが、北部、具体的には、名護市より北には中規模の医療機関が2施設しかなくて、事故などがあったときは、中南部まで搬送する必要があります。救急車だと30分以上かかってしまうので、ドクターヘリが出動します。

**伊藤** 先ほど運航管理士に伺ったんですが、ここでは潜水病を起こしたダイバーの搬送も珍しくないとか。

**宮里** はい、多いです。慶良間諸島はダイビングのメッカなので、あとは、ハブに噛まれたという要請もあります。  
**伊藤** そこは沖縄らしい。浦添総合病

**PROFILE**

浦添総合病院救命救急センター  
外来主任代行  
**宮里 望さん**

平成7年、沖縄看護専門学校卒業。沖縄県内の急性期病院、東京都の三次救命センター勤務を経て、平成23年に当院に入職。5年間のICU勤務の後、救急外来に異動。DMATとしても熊本地産でも活動。



# 誰よりも早く現場で看護にあたれる それがフライトナースの魅力と宮里さん 彼女のようには救急を志望する看護師が 多いという沖繩の未来は明るい

院のフライトドクター、フライトナースは何人いるのでしょうか。

**宮里** 医師は8人、看護師は10人です。当院の救急は人気があつて、希望者が多いんです。私もその一人です。

**伊藤** 一般的に、救急を希望する医師や看護師は少ないと言われていますが、ここはちょっと違つていそうですね。

**宮里** 私の場合、ずっと救急をやりたいくて、看護師になつて4年目に東京の三次救急の医療機関に行きました。浦添総合病院は三次救急の施設であり、ドクターヘリやDMATを持っていたので、沖繩に戻つても救急に携われると思つたんです。でも、第一希望は叶わず、5年間はICUでの経験は今に生きているのではないですか？

**宮里** そうですね。急変時の判断では、そこを間違つたと患者さんの不利益になりかねない。施設間搬送では呼吸管理などにも必要です。ICUで勉強したこと

**伊藤** フライトナースとして現場に関わると、どうしても搬送されてからの患者さんの状況がわかりにくく。そう考えると、ICUでの経験は今に生きているのではないですか？

**宮里** そうですね。急変時の判断では、そこを間違つたと患者さんの不利益になりかねない。施設間搬送では呼吸管理などにも必要です。ICUで勉強したこと

とはとても役立っています。

## 離島ならではの周産期事情 妊婦のヘリ搬送が今後の課題

**伊藤** そもそも宮里さんは、なぜ救急に携わりたいと思つたのですか？

**宮里** ありふれたきっかけで申し訳ないんですが、「ER」や「救命病棟24時」を見て、憧れました。

**伊藤** 東京の三次救急の医療機関にもいたということですが、沖繩とは違うと感じたことはありましたか？

**宮里** まず規模が違いました。それから「たらい回し」の現場を経験しました。東京にはこんなに医療機関があるのに、どうしてたらい回しが起こるのだろうと、心が痛くなりました。

**伊藤** 2008年に東京で起きた妊婦さんのたらい回しは、僕がメディアとして公にしました。あれから東京都も抜本的に周産期の搬送システムを改善して、だいぶよくなりました。

**宮里** 沖繩では、たらい回しはあまり耳にすることがありません。それは、日常の医療から救急医療まで県内で完結しなければいけない環境であること

や、重症度のくくりではなく、ER型の体制を取っている病院が多いことが挙げられると思います。

**伊藤** なるほど。僕は周産期の妊婦さんはドクターヘリでほとんど搬送すればいいと思つているんです。

**宮里** そうですね。私が実際に妊婦さんの搬送に立ち合った経験は1度しかなく、それは切迫早産疑いのケースでした。沖繩の離島には産科医の不在のところが多いため、離島の妊婦さんは出産前に本島に入って備えることとなります。ただ、島で過ごす間に転倒など何かあったときは、やはりヘリで運ぶしかないと思つています。

**伊藤** 妊婦さんの搬送は、ハードルが高いですか？

**宮里** 正直なところ、高いと思います。医師も、救急の知識は豊富でも、周産期の経験がありません。今は、周産期を専門とする医師や医療機関にお願いしてピックアップもありで運ぶ体制になっています。でも、そうやってでも運ぶべきだと感じています。

**伊藤** ぜひ、お願いします。こうやって話をしている、宮里さんの情熱をすこく感じるんですが、ドクターヘリの魅力はどこにありますか？

**宮里** 院外で患者さんに接触して、1秒でも早く治療に関われるところに、惹かれています。できることは限られ

ているのですが、それでも患者さんを助けたいという思いがあります。

**伊藤** ヘリナースをしてよかったですと思つた経験はありますか？

**宮里** 離島に遊びに行ったときに、鳥の人から「フライトナースさんですね。鳥の助けてもらつて、ありがどうございました」と言つていただいたんです。あのときは、何にも変えられないほど嬉しかったです。

**伊藤** 宮里さんは多くの患者さんに関わるから、すべてのケースを覚えているのは難しいけれど、患者さんや家族はしっかり覚えていきますよね。

## 基本は一人で判断し動く 欠かせないチームワーク

**伊藤** 反対に、つらかったことはありますか？

**宮里** そちらの方が多いです。多くは自分の実力不足から起こるので、弱気になることもあります。「ほかの看護師だったなら、違う結果になつていたらかもしれない。もっと良いケアをしていたかもしれない」と思つて……。  
**伊藤** 例えば？

**宮里** 乳児のCPA症例を搬送したことがあります。最終未発症時間が分からなかったのですが、明らかに顔色が悪くて、大人であれば現場で看取することもありますが、このお子さんには

挿管して、CRPをしながら小児科のある医療機関まで運びました。

**伊藤** AEDは使つたのですか？

**宮里** 適応外だったので使っていません。他県ではCPA症例はドクターヘリには乗せないようなのですが、沖繩は全例ではないものに乗せます。

**伊藤** その事例で、宮里さんは思うところがあつたんですね。

**宮里** はい。このときに父親が同乗されたのですが、お子さんを直視できていない、触れることができない。そのときの様子がどうしても忘れられなくて。果たしてお子さんがあのような状況のときに、ご両親を乗せるべきだったのか。ご家族のケアに関して、小児の救急搬送に慣れていなかった自分もいて、その力不足を感じました。

**伊藤** 難しいですね。そういうケースでも、院内であれば誰かに相談できるけれど、ドクターヘリでは医師と連携



待機中のドクターヘリのチーム。要請がない間は談笑なども

伊藤集也  
が行く  
vol.48

## 子育てママさんフライトナース これからのドクターヘリに期待

**伊藤** インタビューの最初で、浦添総合病院ではフライトナースを希望する看護師が多いと聞きましたが、先輩からひとと言アドバイスをお願いします。

**宮里** たいへんなことも多い仕事ですが、勇気を持って飛び込んでほしい。

はあとしても、基本は一人で判断したり動いたりしなければならぬ。

**宮里** そうですね。だから、活動中は医師とコミュニケーションを取ること

を心がけています。

**伊藤** チームワークはいいですね。

**宮里** とてもいいです。

**伊藤** 失礼ながら、先ほどスタッフに宮里さんのことを伺つたら、医師は「現場では積極的な声をかけてくれるので、やりやすい」と、機長も「コミュニケーションが取りやすく、空で冗談を言い合える」なんて言っていましたよ。

**宮里** 嬉しいですね。機長には現場で手が離せないときに点滴を持つてもらつたりしたこともあります。逆にフライト中は、医療スタッフも一緒に安全確認を行つています。

**伊藤** 機長によると、「お互いがお互いの中にちよこつと入り込んで、カバーし合う存在」なのだ。患者さんを安全に運ぶには大事なことですよね。

やつてみて、しんどくなつたら速慮なく言つてほしいです。あとは体力、精神力勝負なので、休日はしっかり休んで体調を整えることでしょうか。

**伊藤** しっかり休んでいますか？

**宮里** 休日はひたすら寝ています。あとはよく食べますね(笑)。

**伊藤** 今の働き方はどうですか？

**宮里** ワークライフバランスについて、新人のころに比べてたら格段に良くなりました。子育てしながらフライトナースをされている方もいます。

**伊藤** それはいいですね。ご自身は今後のことをどう考えていますか？

**宮里** 一つは後輩の育成です。フライトナースになる看護師の、年齢層の中心は30歳前後です。年齢的に結婚や出産を控えているので、続けていけないケースがあります。常に新人のフライトナースが入ってくる状態なので、しっかり伝えるべきことは伝えていきたいと思つています。

**伊藤** ドクターヘリに関しては？

**宮里** こうして来ていただくと分かりませんが、ヘリポートから病院まで距離があります。今だと救急車で5分もかかってしまいます。この時間のロスと患者さんの負担を考えると、もう少し何とかならないかなと思つています。  
**伊藤** 新病院の建設も予定されているんですね。

PROFILE  
**伊藤集也**  
(いとうしゅんや)  
医療ジャーナリスト・  
写真家  
医療情報研究所代表

患者中心の医療を実現するため医療ジャーナリストとしてテレビや雑誌などのメディアで活動中  
ホームページ shunya-ito.tv

機長らチームの皆さんと